分析リポート

イラク移行政権と国民議会構成にみる戦後イラクの政治勢力

酒井啓子

イラク戦争から二年を経たイラクでは、五月八日にようやくイラク人による民選議会を踏まえた移行政府が成立した。戦後一年二カ月の連合軍による占領体制、九カ月間のアメリカの任命による暫定政権体制を経て、初めて民意を反映した政権が成立したのである。

しかしその誕生は決して順調とはいえなかった。移行政府発足の基礎となる国民議会選挙が一月三〇日に実施されながら、その結果発表は二月一八日まで待たなければならず（選挙結果は表1参照）、さらには第一党のイラク統一同盟（ＵＩＡ）と第二党のクルド同盟リスト（ＫＡ）の間で首相指名の調整がつかないまま、国会の開催自体、三月一六日までずれ込んだ。正副大統領が指名されたのが四月七日、首相は同月九日に任命されたが、さらに組閣は難航を極め、閣僚の顔ぶれがほぼ全員確定したのは五月八日となった。

三カ月以上にわたってイラク政権の空転を招いた原因は、第一党のシーア派イスラーム勢力と第二党のクルド民族主義勢力との間の調整の難航、そして選挙で代表性を確保することのできなかったスンナ派社会、特に反米勢力の強い中部紛争地域をいかに政権内に取り込むかに苦労したことにある。だがそこで問題となっているのは、単なる宗派的、民族的な権力配分ではない。むしろ深刻なことは、政府自体の政治的方向性を巡る対立が底流に存在している点である。

具体的には、移行政府の主力を占めるシーア派中心のイスラーム主義政党が、その根幹に持つ政治イデオロギーとしてのイスラーム主義を、「多数派」の地位を利用してどこまで実現に向けた動きを進めるのか、という点が最も関心を引く。さらに注目されるのは、移行政府の中心的な政治力学が、イラク戦争前後に対米関係を強化してきた、いわば対米・対外交渉経験を持つ元亡命政党によってではなく、むしろ対米接点を持たない純粋な国内発生型のイスラーム政党の台頭によって主導されて

表1　1月30日の国民議会選挙結果（2月18日発表）

政党・会派名	得票率(%)	議席	主要所属政党、政治家	性格
イラク統一同盟（United Iraqi Alliance, UIA）	48.2	140	SCIRI、ダアワ党、INC、バドル組織、トルコマン・イスラーム連合、ファディーラ党	シーア派中心、INC以外イスラーム主義系
クルド同盟リスト（Kurdistan Alliance, KA）	25.7	75	KDP、PUK	クルド民族、世俗主義中心
イラク・リスト	13.8	40	INA（アッラーウィ元首相）、カースィム元国務相	宗派混合、世俗主義
イラキユーン	1.8	5	ヤーワィル元大統領、ハサニ元イラク・イスラーム党幹部	スンナ派、イスラーム主義・世俗混合、部族
イラク・トルコマン戦線	1.1	3	トルコマン諸政党	トルコマン民族
国民幹部エリート集団	0.83	3	サドル派の一部	シーア派、イスラーム主義
人民連盟	0.83	2	イラク共産党	宗派混合、世俗主義
クルド・イスラーム協会	0.72	2		クルド、イスラーム主義
イスラーム行動組織	0.51	2		シーア派、イスラーム主義

（出所）独立選挙委員会ホームページ（http://www.ieciraq.org/）などから筆者作成。

いるのではないか、という点である。そうした内発型の国内政治勢力の戦後の急速な政治進出は、既存の亡命政党間の政治調整を困難にさせるのではないか。

本稿では、今回成立したイラク移行政府の基本的な性格を分析し、そこから浮かび上がってくる問題点を概観したい。とりわけ、第一党の地位を獲得したＵＩＡを中心として、シーア派イスラーム政党の現状を追う。

●フセイン政権「全否定」型政権へ

まず国民議会および移行政府の性格を最も端的な形で表すとしたら、それはアッラーウィ暫定政府のフセイン体制部分否定政策から、全否定への転換ということになろう。第一党のＵＩＡを主導するイラク・イスラーム革命最高評議会（ＳＣＩＲＩ）やダアワ党などのイスラーム政党、第二党に属するクルディスタン民主党（ＫＤＰ）やクルディスタン愛国連合（ＰＵＫ）は、一九七〇年代以来フセイン政権と、武力闘争を含めて対決姿勢をとってきた。自分自身一九七〇年代までバアス党に在籍し、フセイン政権下の軍人やバアス党員でも戦後新体制のなかで積極的に起用していこうとしてきた、アッラーウィ元首相とは、戦後体制のあり方に対する考え方が全く異なる。

特に、ＵＩＡのなかで中心的位置づけを占めるＳＣＩＲＩは、「バアス党員を権力の座に戻すことは、治安と政治的安定を覆すことになる」（二〇〇五年一月四日付『ハヤート』紙によるサアド・ジャワードＳＣＩＲＩ政治局副局長発言）と見なして、旧バアス党員パージ政策を推進している。移行政府組閣の過程でＳＣＩＲＩが、ＳＣＩＲＩの元軍事部門であるバドル部隊を改組したバドル組織のハーディー・アーミリー代表を、内相に任命すべし、と要求していた（三月三日付『サバーハ・ジャディード』紙）ことからも、ＵＩＡの主流派が治安分野の対バアス党宥和政策を全面的に見直し、反バアス党政策を徹底して追求していたことがわかる。こうした反バアス党姿勢は、特にサ

ドル派やヒズブッラー運動などの国内発生型政党の間ではより強いものと見られる。

そうした反バアス党姿勢は、「アッラーウィ政権は旧バアス党員に寛大すぎる」とのサドルッディーン・クバンジーSCIRI幹部の金曜礼拝での説教（二〇〇四年一二月四日付『マシュリク』紙）に象徴されるように、アッラーウィ暫定政府批判につながった。そのため、選挙直後から勝利を確信したUIAは、早くからアッラーウィの治安政策に対する非難、アッラーウィとの連立拒否を表明してきた。

こうしたアッラーウィ政権に対する反発は、新政権成立以前から、特に現場の警察、治安組織の間でアッラーウィ派とUIA派の治安組織の掌握を巡る衝突となって現れた。たとえば三月、ナジャフではUIA系の治安部隊が、アッラーウィ派知事に反発して暫定政府の治安機関を急襲し、実力でその武器、施設を押収する、という事件が発生している（三月四日付『フィナンシャル・タイムズ』紙）。

フセイン政権の部分否定か全否定か、という問題は、クーデターか革命かほどの相違を生む。イラン・イラク戦争期に、イランの支援を受けてイランからイラク国内に潜入させられたバドル部隊に対して、それを「外敵」として戦った経験と記憶を持つ、あるいは彼らによって命を失ったイラク人は少なくない。SCIRIやバドル組織の起用が、強硬な反バアス性／報復性によって、過度の不安と混乱を呼び起こしたことは事実だろう。ハーディー・アーミリー代表は二月二四日に、「バドル組織が元バアス党員を殺害している」との噂をわざわざ国内紙（『フラート』紙）上で否定し、「バアス党解党政策には賛成だが、強要されて入党した党員にまで反対するものではない」、と弁明している（四月二四日付『シャルク・ル・アウサト』紙）。

さらにこうしたSCIRIの反バアス党姿勢は、周辺アラブ諸国との軋轢にも繋がっている。二月二八日、ヒッラでシーア派住民に多くの被害を出した自爆攻撃にヨルダン人が関与していたことを巡って、SCIRI幹部のアンマール・アル＝ハキームやジャラール・アッディーン・アル＝サギールは、ヨルダン政府の対バアス党、対サダム・フセイン関係を槍玉に挙げて、非難した（三月二七日付ジャズィーラ放送および三月二〇日付『ダアワ』紙）。

こうした移行政府主流派の過度の反バアス党政策や、旧軍・旧官僚に多いスンナ派アラブ人エリートに対する排除政策が生み出す衝突と社会不安を懸念して、移行政府首相はある程度反・旧体制姿勢やイスラーム主義色を薄める組閣を心がけた。国防相やスンナ派副首相人事が最後まで難航したのは、UIA主導の内閣でありながらも、ある程度旧体制の不満層、とりわけ剥奪感の強いスンナ派と密接なつながりを持つ人材の起用を模索したからだといえる。反政府ゲリラ活動の最も激しいアンバール県の主要地元勢力、ドゥレイミー部族の出身者から国防相、地方担当国務相、同じく同地域出身の文化相が任命されたのは、紛争地帯出身者の登用（反政府側から見れば「一本釣り」の懐柔）を、偏向ともいえるほどに重視した結果である。また副首相のジュブーリも、ティクリート、サマッラーなど反米活動の激しい地域の有力部族出身で、息子を反米抵抗運動のなかで亡くしている。しかしここで留意すべき点は、閣僚登用されたスンナ派地方勢力は、これまで何らかの政党活動に関与し国政選挙などの政治プロセスに参加してきたのではないことである。この問題については、後述する。

ところで、UIAの主要政治家のなかでダアワ党党首のイブラヒーム・ジャアファリが首相に任命されたのは、彼が過度のイスラーム性、反バアス党性を自制できる人物と見なされたからであろう。ダアワ党は、SCIRIや他のイスラーム政党に先立ち設立された、イスラーム国家建設を最終目標とするイスラーム主義政党で、イラクのイスラーム主義運動の先駆的存在である。だが政党幹部に非ウラマーが多く、対外広報上イスラーム主義の強調を避けるなど、他政党との政治的調整能力はS

ＣＩＲＩやバドル組織に比べて高いことが期待できる。選挙前、ドイツ政府の支援で運営されるイラク・ラジオ局の「選挙モニター・イラク」が、主要立候補政党に「政策のなかで最重要視する要素」、「憲法に盛り込むべき要素」を問うたアンケートで、ＳＣＩＲＩは憲法における重要な構成要素として「イスラーム的アイデンティティ」を真っ先に挙げ、またバドル組織はいずれの回答でも「イスラームを最重要視しイラクの統一や人権に勝る」、とした。これに対してダアワ党は、イラクの統一や国民の自由を最優先させ、イスラームという言葉を一切避けた（同ラジオ局のホームページ http://www.electionmonitoriraq.com/ による）。また対旧体制派政策に関してジャアファリは、首相就任以前から「バアス党に対しては抑圧すべきではないし、共存するものであるが、前政権の中枢にあった者を起用したり新体制の中核に据えることは望ましくない」（二〇〇四年一一月二日付『ムスタクバル』紙）と、「全否定」方針を薄めてきた。

とはいえ、そうした慎重論に対して、逆に政権内部から反バアス党政策の徹底を呼びかける声も高まっている。アブドゥル・アジーズ・アル＝ハキームＳＣＩＲＩ議長は移行政府任命当日の演説で、「アフラク主義者（＝バアス党員）とフセイン支持者はイラク人民の敵である…犯罪者たるフセイン支持者全員を全ての省庁から排除する、という基本法の規定を、移行政府が遵守することを求める」と牽制した（二〇〇五年四月二八日付『シャルキーヤ』紙）。ＳＣＩＲＩとダアワ党という、戦後米占領下で戦後政権に関与してきた二大イスラーム政党の間でも、旧体制派に対する政策には温度差を見ることができる。

●シーア派イスラーム勢力の連合化と対米従属姿勢の希薄化

暫定国民議会と移行政府の陣容に表れた第二の特徴は、シーア派イスラーム勢力の連合確立の成功である。国民議会選挙で四八％の票を獲て二七五議席中一四〇議席を獲得したＵＩＡには、ダアワ党、ＳＣＩＲＩなどの既存の元亡命政党の他、ファディーラ党（サドル派同様故ムハンマド・サーディク・サドルを信奉する国内イスラーム勢力）やダアワ党イラク機構、イラク・ヒズブッラーなどのイスラーム政党が加わっている。アフマド・チャラビ率いるイラク国民会議（ＩＮＣ）やスンナ派部族勢力（シャンマル部族のファワーズ・アル＝ジャルバ）、トルコマン・イスラーム連合、シーア派クルド勢力（フェイリー・クルド）など、シーア派アラブのイスラーム政党以外の政治勢力も加わっているが、基本的には、スィスターニー師らシーア派イスラーム宗教界の社会的影響力を前提とした政治連合だといえよう。

ここで留意しなければならないのは、この連合が反米勢力も含めて形成されている点である。アッラーウィやクルド勢力などとともに暫定政府の一角を担っていたダアワ党やＳＣＩＲＩがＵＩＡに参加したが、サドル派の一部など米占領に対して明白に反対を掲げる勢力も、ここに組み込まれている。

表2は、反フセイン諸勢力が、イラク戦争の戦前から戦後にかけてフセイン政権転覆に起用されたかどうか、そして戦後はイラク統治に登用されたかどうかを表したものである。そこで見て取れるのは、アッラーウィに代表される世俗系の親米政党の登用が戦前から暫定政府まで拡大傾向にあったのに、選挙後は政治中枢の舞台から姿を消していることである。スンナ派諸勢力も、戦後俄仕立て的にさまざまな勢力が登用されて政治組織化されたが、選挙後まで生き延びたのはガーズィー・ヤーウィル元大統領率いる部族勢力のみであった。

それに対して、シーア派イスラーム勢力のなかで、戦前米政権が積極的に起用したのは、ＳＣＩＲＩと後にシーア派政治評議会を形成する一部のシーア派個人政治家だけであったが、戦後米占領下の統治評議会にはダアワ党とその分派（ダアワ運動）、またイラク・ヒズブッラーなどの国内組織が加わった。さらに暫定政府が設置した諮問評議会には、ファディーラ党や

表 2　戦前・戦後のイラク政治過程への各政治勢力の参加

	米支援対象*	02 ロンドン会議**	03 統治評議会	03 占領期内閣	04 暫定政府	04 諮問評議会	05 国民議会	05 移行政府
UIA および類似のシーア派イスラーム系								
SCIRI	○	○	○	○	○	○	○	○
ダアワ党			○	○	○	○	○	○
イラク・ヒズブッラー			○			○	○	
イスラーム・ダアワ運動		○	○			○		
ファディーラ党						○	○	
ダアワ党イラク機構						○	○	○
（シーア派政治評議会、ただし（ ）は INC）	(○)	(○)	(○)	(○)		○	○	
イスラーム行動組織						○	○	
スィスターニー師側近						○	○	○
国民幹部エリート団（サドル派）							○	○
クルド系								
KDP	○	○	○	○	○	○	○	○
PUK	○	○	○	○	○	○	○	○
クルド・イスラーム連合	○	○	○			○		
クルド共産党		○				○		
クルド民衆運動						○	○	
イラク・リストなど世俗系								
INA	○	○	○	○	○	○	○	
イラク国民運動	○	○			○			
（イラク民主運動）					○			
（イラク国民運動・無所属市民社会連合）		○				○		
イラク国民連合	○	○				○		(○)
イラキユーンおよびスンナ派諸勢力								
イラク・イスラーム党		○	○	○	○	○		
イラク無所属民主派		○	○	○	○	○		
（国民民主党）			○	○	○	○		
イラク国民行進（ジュブーリ部族）		○			○	○	○	
（国民民主同盟）			○	○				
（イラキユーン）			○		○		○	○

（出所）筆者作成。
（注）かっこ内の政党は、戦前は政党として存在せず、戦後に取り立てられた／台頭した個人政治家が、複数政党制導入を想定して 2003 年以降組織化されたもの。* 1998 年米政権が制定した「イラク解放法」に基づき 1998 ～ 2003 年の間米国の資金援助対象となった反フセイン組織。** 2002 年 12 月にロンドンで開催された反フセイン勢力結集会議で設立された「フォローアップ委員会」を指す。参加者はポスト・フセイン体制の受け皿となることを期待した。

図１　イラク県別地図

ダアワ党イラク機構、そしてスィスターニー師の側近など、専ら国内に活動基盤を持つ政治的、社会的有力者が加わり、裾野を広げている。

このシーア派イスラーム勢力登用拡大の過程では、国内発生型の新興政治勢力の登用が目立つが、重要な点は、拡大登用された国内勢力のほとんどが米国との接触経験が少ない（ダアワ党イラク機構やファディーラ党など）ばかりか、サドル派に代表されるように反米姿勢を明言してきた勢力が多いという点である。

ＵＩＡが獲得した一四〇議席のうち、占領期、暫定政権期に政権参画経験のある政党が獲得した議席数は、ＳＣＩＲＩが一八議席（一三％。ＵＩＡリスト中の第一、一七、三一、六一、九八、一〇七、一一三位などを占める）、ダアワ党が一五議席（一一％。第二、一一、一四、三五、五三位など）、シーア派政治評議会一三議席（九％。第一〇、二九、三〇、三六、五九、七九、一一〇、一一六位など）、ダアワ党イラク機構九議席（六％。第一一、二三位など）である。その一方でこれまで政権中枢に登用経験が全くなく、対米接点ももたなかった勢力が得た議席数は、サドル派二一議席（一五％。ＵＩＡリスト第三八位など）、ファディーラ党九議席（第一三、二六位など）、フェイリー・クルド（シーア派クルド勢力、三％。第四四、九五位など）四議席と報じられている（二月二一日付『ハヤート』紙）。また、基本的に宗教権威の政治介入に消極的なスィスターニー師の側近であるフセイン・アル＝シャフラスターニーやアリー・アブドゥルハキーム・アル＝サーフィー（スィスターニー師のバスラでのワキール〔代理人〕）がリストの高位につけられ議席を獲得していることも、国内、特に地域社会での社会的影響力を背景とした政治家が台頭していることを示している。なおサドル派は「国民幹部エリート集団」としてＵＩＡ外からも立候補し、三名の当選者を出しているが、選挙後ＵＩＡと連立を組むことで合意した。

こうした国内発生型の政治勢力は、それまで対米依存体質を持たないことから、米占領路線の中での政治復興過程に率直に反対を表明することもしばしばである。国会選挙で初めて国政過程に参加した反米強硬派のサドル派はもちろん、ダアワ党イラク機構（ダアワ党から一九八〇年代に分派）は、二〇〇四年三月にファディーラ党、イスラーム合意、イスラーム行動組織などとともに統治評議会の基本法制定に反対する会派を形成した（二〇〇四年三月一八日付『ハヤート』紙）、という事例も見られる。

一月の国会選挙結果に基づけば、サドル派やファディーラ党など、これまで政権参入経験のない政党による閣僚登用要求が強まるのは当然であろう。政権中枢三九名（閣僚および正副大統領）のうち、サドル派の登用は最低でも三名で、ＳＣＩＲＩ幹部の登用が二名、ダアワ党は一名であるのに比較すれば、大躍進といえる。一方ファディーラ党は、最後まで石油相ポストを要求したが退けられ（二〇〇五年四月二七日付『フラート』紙）、またイラク・ヒズブッラーは三月、組閣が進まないことを批判してＵＩＡから脱退を表明した。

●地方政治勢力と中央との乖離

右で見たような、国内発生型の新興イスラーム政党の台頭と、

表3　県議会選挙結果と知事選出

	県名	県議会選挙第一党	選出知事の出身政党	県内の国会選挙第一党とその得票率
既存政党が第一党確保	ナジャフ	SCIRI	SCIRI リスト1位	UIA 79%
	カルバラー	SCIRI	SCIRI リスト8位	UIA 70%
	ムサンナ	SCIRI	SCIRI リスト1位	UIA 77%
	ディーカール	SCIRI（ファディーラ党と同率）	SCIRI	UIA 81%
新興・地元勢力が第一党	マイサン	イマームフセイン思想クラブ	同左1位	UIA 69%
	ワーシト	イラク・エリート連合	同左22位	UIA 73%
	バービル	「忠誠あるイラク人」協会	同左10位*（バドル組織）	UIA 79%
	ディヤーラ	県イスラーム国民勢力同盟	同左1位	UIA 43%
	タミーン	キルクーク同胞リスト	同左1位	トルコマン戦線 60%
	アルビル	クルド民主の声リスト	同左1位	KA 95%
知事が第一党以外から選出	バスラ	イスラーム・バスラ	ファディーラ党（第二党）1位	UIA 70%
	サラハッディーン	県統一民主同盟	INA（第6位）1位	UIA 22%

（出所）筆者作成。新知事就任は確認されたが県議会との関係が不明だったり（バグダード、ニネヴェ、カーディスィーヤ、アンバール）、新知事選出が確認できなかった（スライマニーヤ、ドゥホーク）県を除く。
（注）＊知事は左の連合に加わっていたバドル組織から選ばれた。

既存の亡命政党との微妙な関係は、地方政治においてより顕著である。国民議会選挙と同日に、各県では県議会選挙が同じく比例代表式で実施された。そこでは、ＵＩＡやＫＡのような全国レベルの政党連合は組まれず、各政党が独自に候補リストを立てるか、その地域限定の政党連合を組むかであった。県議会選挙の結果は国会選挙結果と同時に発表され、その後三月後半に多くの県で県知事が、県議会によって次々に選出された。

県議会選挙の結果およびそこで成立した県議会での県知事選出を見れば、国会選挙結果と比較して地方政党の得票が多いことがわかる。また一部の地域では、中央政界で活躍する政党のなかでも、新興政党の地方での得票が目立つケースが多い。

表3は、県議会選挙での第一党とそこから選出された知事、そして同県の国会選挙での第一党の得票率を見たものである。ここで顕著なことは、ナジャフ、カルバラーの両シーア派聖地と近隣県のムサンナといった南西部県では、国会選挙でも県議会選挙でも同じ既存の元亡命政党（ＳＣＩＲＩ）が単独で立候補、第一党となり、知事にもその第一党の立候補リストの上位者が選出されている、ということである。

他方、対照的なのは南東部県である。マイサン、ワーシト、ディヤーラでは地元で独自に結成された政治連合が第一党を占めた。特にマイサン、ワーシトでは、住民のほとんどがシーア派であることは南西部諸県と変わりがないが、国会選挙でＵＩＡの得票率が南西部より低いこと、代わりにサドル派の国民幹部エリート集団など国内発生型新興政党が他県に比べて支持を得ていること、といった相違が見られる。国民幹部エリート集団は、国会選挙で、ナジャフ、カルバラー、バービル、ムサンナといった南西部県では一様に得票率一％にも満たないのに対して、マイサンでは四％、ワーシトやカーディスィーヤ、ディーカールでは一・五～二％と、南東部で多く得票している。同様に国会選挙でＵＩＡの得票率が低いバスラでも、県議会での第一党は地元の政党連合、知事はファディーラ党からと、元亡

命政党中心の中央政界とは異なる結果が生まれている。

このような中央政界と地方政界の選好の相違は、南部シーア派地域でのみ見られる傾向ではない。わずかな選挙参加しか得られなかったスンナ派地域では、その乖離がより顕著である。スンナ派住民の多いサラハッディーンの国会選挙でＵＩＡが第一党となったのは、スンナ派住民の投票がごくわずかしか得られなかったということに加えて、スンナ派系政党の小党乱立、政党連合形成の失敗に起因している。そして県議会選挙では、国会選挙での第一党と全く異なる政党が第一党となっているが、さらに知事選出では、県議会第一党を反映しない形で知事が選ばれているのである。サラハッディーンでのＩＮＡ出身知事、アンバールでのジュブーリ部族系知事選出は、地方社会での政治力学を反映するものではなく、むしろ中央政界の権力抗争の余波を受けたものと見られるだろう。スンナ派地域では、ジュブーリ部族やヤーウィル元大統領のシャンマル部族といった非政党勢力の非公式ネットワークを起用することで、政党政治の不在を補完しようという傾向を見ることができる。

●結語

このように、初めての複数政党制に基づく選挙によって固定化されたイラクの戦後政治の勢力図は、以下のように描かれる。イラク南部地域の、特にシーア派聖地を中心とした南西部とクルド地域（今回は紙幅の関係から分析できなかったが）では、中央政界に基盤を置く既存の元亡命政党が、戦後急速に発生してきた新興地方政治勢力を、自派連合に取りこむことにある程度成功し、地方政界も中央政界と同様に既存政党主導での政治運営が可能となった。しかし同じシーア派住民が多数を占める南東部では、地方政界は中央とは異なる政治志向を示し、既存亡命政党よりも新興政党あるいは地元勢力を選好している。

こうした地方と中央の志向の乖離は、ある意味では中央政界が地方の政治状況を反映できないことにも繋がる。ＵＩＡの中心勢力として元亡命政党より多くの議席を獲得したと報じられる、特に地方の貧困地域に支持基盤を置くサドル派などが、中央政界でその実力に見合った権力を確保できないとなれば、統治評議会、あるいは戦前の米政権による反フセイン勢力支援体制などに始まる対米協力的な既存政党と、こうした新興政党の間での、中央権力を巡る対立に発展する可能性も出てこよう。特にＵＩＡ自体が強い反・旧体制政策を掲げるなかで、ジャアファリ首相を中心とした政権中枢が旧体制との妥協を強いられる形になれば、より強硬な反バアス党政策を支持する新興政党との関係調整が困難になる。その点では、同じ元亡命政党であるＳＣＩＲＩがより急進的な反バアス党政策を打ち出し、新興勢力の取り込みを図っていると見ることもできるかもしれない。

しかし既存政党が、政権内の共闘態勢よりもＵＩＡの枠のもとでの新興政党の取り込みに力点を置けば、それは新興勢力のもつ地方基盤の政治力学に中央政界が引きずられることにもなる。新興勢力が反米的あるいは対米依存度が低いことを考えれば、ＵＩＡ主導の新政府の対米関係も微妙なものとなろう。

スンナ派の多い紛争地域では、住民意思を代表する政治政党の確立は遅れており、部族などの非政党組織が代替的に中央政界に取りこまれる傾向にある。概観すれば、現在のイラクでは一般的に、中央政界で代表しえない地方の諸勢力を、中央から取りこむ形で政権の安定性を維持しようという方向性と、地方で県議会などを軸に政治的代表性を積み上げていこうという地方勢力の方向性が、せめぎ合う過程にあるといえる。そしてそのせめぎ合いが比較的矛盾なく調整されている南西部およびクルド地域と、乖離が緊張を孕む南東部、そして全く調整できずに暴力への依存が深まる中部紛争地域という具合に、地域的、宗派的なアンバランスがますます色濃くなっているのが、現在のイラクの政治状況といえよう。

（さかい　けいこ／アジア経済研究所新領域研究センター）